

『経済成長がすべてか？ ～デモクラシーが人文学を必要とする理由』

マーサ・ヌスバウム著 小沢自然・小野正嗣訳 岩波書店／2013年

(Nussbaum, Martha, 2010, *Not for Profit: Why Democracy Needs the Humanities*,
Princeton University Press)

小ヶ谷千穂

「実質的に世界のすべての国々で、^{ヒューマニティーズ}人文学と芸術が、初等・中等教育および大学などの高等教育において切り捨てられつつあります。グローバル市場での競争力を維持するために各国があらゆる無駄の切り捨てを余儀なくされる時代、人文学と芸術は政策決定者からは無用の長物とみなされ、カリキュラムにおいてのみならず、親や子どもたちの心においても、従来の地位を失いつつあります。……

……危機が迫っているのに、私たちのほうはまだそれを直視していません。すべてはこれまでどおりに動いているかのように私たちはふるまっていますが、現実には、至る所で重点の置き所に大きな変化が生じているのは明白です。私たちはこうした変化についてあまり真剣に考えていないのです。この変化は私たち自身が選択したものではありませんが、私たちの未来をますます狭めているのです。……」(p4)

アメリカとインドを主な事例としながら、大学教育における人文科学(Humanities)の「静かな危機」について論じている本書を手にしたとき、「予言の書」という言葉が頭をよぎった。しかしこれはもう、「予言の書」どころではなく、今日の日本、そしてわれわれの所属する横浜国大についての分析であると言っても何の不思議もない、「危機」についての報告、そして警告の書である。このことに大げさに反応する必要はないのだろう。

グローバル化の中で、世界の教育研究の方向性が（とりわけ日本においては、「グローバル人材」という赤面もののキャッチフレーズの下で）、収斂しているのだから。

本書を通じてのヌスバウムのシンプルで穏やかな、それでいて手に取るようなリアリティがにじみ出る記述を通して見えてくるのは、昨今の人文学への不当な軽視に対して、それを批判する側にもしかすると足りなかった主張の一つと、——少なくとも評者には——思われるものである。それは、「職業教育への偏重が、ソクラテス的な議論に裏打ちされたデモクラシーを侵食して行く」という論点だ。

ヌスバウムはこう述べる。

「私が懸念しているのは、科学や技術と同じくらい重要な他の諸能力——デモクラシーの内的な健全性のために不可欠であり、同時に、きわめて切迫した世界の諸問題に建設的に対処する良質な世界文化の創出のために不可欠な諸能力——が、競争による混乱のなかで見失われそうになっていることなのです……。そうした能力は、人文学および芸術と密接に結びついています。批判的に思考する能力。ローカルな執着を乗り越えて、『世界市民』として世界の諸問題に取り組む能力。そして他人の苦境を共感をもって想像する能力のことです」(p9)

「批判的思考」は、経済成長のための教育にとってはそれほど大事ではない、とされている (p27)。他者への共感を「育まず」、それぞれの立場を入れ替えた討議のトレーニングを「しなくなる」ことは、国家にとっては、批判的思考力や能動性をもたずに、提示された単一のゴール——たとえば「経済成長」——に、向かってひたむきに走る従順な「手ごま」を持てることにつながるからだ。こうした「危機」が、何も先進国に限らず、いわゆる発展途上国や新興国においても進みつつあることの指摘も重要である。言語や宗教の多様性、文化の価値などについて、過去と現在の間を往来しながら学ぶ「人文科学」や、人間の可能性に思考を馳せる「芸術」に関する教育の欠如が、たとえばカースト制度のあるインドにおいて、社会にお

ける振る舞いや、身の回りの関係における多様性への深い理解，という社会的実践において、きわめて深刻な意味を持ちうることに本書では危惧されている。

「人文科学」や「芸術」の、教育からの締め出しによって生じること。それは、判的思考、他者への共感と想像力という、「デモクラシー」の根幹をなすものの長期的な喪失であることを、本書は繰り返し教えてくれる。インド出身の文学批評家であるガヤトリ・スピヴァクは、グローバリゼーションにおける人文社会科学の役割を、「学問的アクティヴズム」と呼ぶ。(G.C.スピヴァク／鶴飼哲監修『スピヴァク、日本で語る』2009年、みすず書房) 複数の言語を深く学び、哲学や文学を学ぶことから思考力と想像力を培うことが、均一性を求めるグローバリゼーションを代補する、「訓練されて鍛えられた想像力」を育むのだ。

2015年1月1日に急逝したドイツの社会学者、ウルリッヒ・ベックは、今日を「第二の近代」と名付け、まさに「経済成長」や「合理性」という命題に貫かれていた「第一の近代」に対して、「再帰性reflexivity」がある意味運命づけられている時代だと論じた。日本のアカデミズムにおいても、——たとえば「文理融合」という言葉が本来示しているように——既存の学問の壁を取り払いつつ、それぞれの学問を再帰的に問い直すきわめて知的な作業が求められているはずであり、それこそが21世紀的な知のあり方のはずである。しかし、ヌスバウムが本書で「警告」するように、われわれを囲む状況は、巧妙にこの再帰的な知的作業を、異なる目的の下へとすり替えつつある。

しかし、である。21世紀はまだ15年しか経っていない。本書の「警告」を受け止めた今、悲観するのはまだ早いと信じたい。

(都市イノベーション研究院・准教授)